

デジタル 電子化時代の歴史研究——その課題

毛里和子

一 デジタル化の恩恵

たしか、二〇〇一年のことだったと思う。パソコンをいじっていて、米国の国立公文書館（NSA）、国家安全保障公文書館（NSA）、ウッドロー・ウィルソンセンターなどのデータに紛れ込んだことがある。そのときびっくり仰天した。七二年のニクソン大統領・キッシンジャー補佐官と毛沢東・周恩来の会談記録のほとんど、翌年には一九七一年七月と一〇月のキッシンジャー・周恩来会談の九〇パーセント以上を目にすることができたのである。当時、「米国はさすがだ」と思いながら、胸をわくわくさせて膨大な記録をプリントアウトし、夜を徹して読み込んだ。すばらしい第一級の史料だった。

こうして、NSAにもNAにも一度も

行ったことがない評者を中心に、歴史的米中会談の記録を翻訳することになった。その結果が、『ニクソン訪中機密会談録』（名古屋大学出版会、二〇〇一年）と『周恩来・キッシンジャー機密会談録』（岩波書店、二〇〇四年）である。いまでは、人々は七一一七二年の米中リーダーの息詰まる交渉のほとんどを知ることができ

る。もう一つの恩恵は最近のものだ。中国期刊全文数据库（CAJ）を含むいわゆるCNKIのデータベースである。米国のNSAなどのデータベースと違って、アクセスの際は有料、中国では同方知網（北京）技術有限公司が提供し、日本ではそれを東方書店が仲介している。国会図書館などの大きな機関が集団顧客となり、また有料カードを使う個人顧客も増

高田幸男・大澤肇編著

新史料からみる中国現代史

——口述・電子化・デジタル・ローカル
——口述・電子化・デジタル・ローカル



A5判 368頁
東方書店 [3990円]

えている。提供者によれば、中国発行の重要雑誌八九〇〇点を対象として、一九九四年以降の二〇〇〇万件以上の文献を収録、毎年八〇万件を追加しているという。CAJに採録されている雑誌は文史哲が七三六件、社会科学が三二七六件だそうである。

評者はいま早稲田大学の図書館を通じて、ほとんどの文献をこのCNKIからダウンロードしている。検索ができ、プリントアウトができるのがなによりありがたい。思えば五〇年前、卒業論文の時には、浙江財閥を調べるために、大学の近くにあった東大・東洋文化研究所に日参して、『銀行週報』を一字一句筆写したのに、いまではこんな安易なことをして

いいのだろうか、と毎日思いながら、CNKIの軍門に下っているわけである。

二 中国近現代史をめぐる新史料状況

そんな中で、デジタル化を含む近現代中国研究の新手法に立ち向かっている若い人々の研究成果を目にした。本書は、日本で活動する中国近現代史研究者が挑戦する、研究の新手法についてのほとんど最初に出た、地味な本である。

編者は、史料と資料については、後者が前者に比べて学術的評価が固まっている、より厳密な史料批判を必要とするもの、あるいは前者を作成後三〇年以上経過したもの、と一応の区別をしているが、両者を総称する場合、どちらともつかない場合を史資料と呼ぶとしている。第一部口述、第二部電子化、第三部地方分権の三部に分かれているが、第一部のほとんどは二〇〇八年六月東洋文庫でおこなわれたワークシヨップ「オーラルヒストリーと中国現代史研究」、第三部は二〇〇九年冬東京で開かれた国際シンポジウム（「江南地域史研究と新史料」）を

文章化したものである。

評者は、近代史や歴史学から離れて長くなり疎くなっているが、本書の近代史に関わる各論考は、地味ながらそれぞれの若い挑戦や息吹が伝わってきて好感がもてる。ただ、現代政治・国際関係を専門とする評者にとっては、第二部電子化がとても興味深いので、この問題から入っていいと思う。

三 史資料のデジタル化は研究を深め、広めることにつながるか

本書第二部では、胡適記念館（台湾）、ハーバード大学を中心にした米国での近現代中国関係史資料のデジタル化、国立公文書館・外務省外交史料館・防衛省防衛研究所図書館の史資料を横断してデジタル化を推進しているアジア歴史資料センターなどの最新の状況が紹介されている。第一〇章「デジタル化時代の中国研究」（大澤肇）はそのまとめとなっているので、この一〇章を中心に論じて見たい。

一〇章によれば、デジタル史資料は、①画像イメージの集合体にメタデータが

付与されたもの（PDFの場合が多い）、②従来の史資料を電子テキスト化したものの、二種類がある。評者は、大澤が紹介する、中国大陸・台湾・米国・日本が作成している主なデータベースに当たってみた。改めて、アジア歴史資料センターの史料はとくに外国人研究者にとって有用だと痛感し、台湾の「国家デジタルアーカイブ計画」に圧倒され、とくに中国大陆における民国期文献・資料の整理・公開ぶりには驚いた。五四運動～一九二〇年代の貴重な雑誌『解放与改造』、『少年中国』、『人民周刊』を何十年ぶりに目にして懐かしかった。史料（檔案）・資料をめぐる状況は激変しているのだ。

その上で、このような状況を研究者はどう受け止めるべきか、どのように利用すべきか、何を警戒すべきかなどについて、考えたことを記しておきたい。

一つは、作成者が公的単位・公人であり、所蔵単位が公的機関である場合、その記録は基本的には公的財産である。利用者は無料で使用することができるし、著作権の問題も生じない。NSAやNA

にある大量の史料をダウンロードして翻訳出版しても、私たちはそれに對して一銭もNSAやNAに払っていない。他方、中国大陆では多くの場合、史料は編纂され、デジタル化史料は有料である。商業ベースで公的財産が提供されるので、費用を払うことになる。言いたいのは、資料には公的なもの、私的なものがあること、その性格、利用方法には当然区別があることである。

第二の問題はもつと微妙だ。本書では、口述や聞き取りなど、文字文献ではないものから近代史を構築する手法の開発を論じているが、昨今、歴史研究をめぐっては、一方で、あらゆる種類の文字・画像文献がデジタル化によって大量に安易に研究者の手に入り、他方では口述や家譜などの非公式資料が歴史学の表舞台に登場してきたという新状況がある。前者は、文献になった資料をして権威化させているし、後者は、権力と非権力の出す史料の区別、その境界が限りなくなくなってきたことを感じさせる。

とくに、前者は実は大変な問題だと思

う。デジタル化されることで史料・資料・文献の権威は高まる。怖いのは、デジタル資料は現物ではないから、すべての資料が同じランクにあるものとして利用者に認識されることだ。デジタルの世界ではすべてがフラットで、中身以外の属性を知ることができない。こうなると、ほとんど意味がなかった史料がデジタル化されることで箔がつき、歴史家に大きな誤解を与えかねない。

四 調査と聞き取り

本書では新手法を使った豊かな経験が紹介され、それぞれが興味深い。「新手法」で歴史研究の材料を集める際には一定の注意が必要だと思うので、それを記しておきたい。

まず、なにを調査し聞き取るか、何を明らかにするためのものか、という点を事前にはっきりさせておく必要がある。仮説の設定も必要だろう。第二が、聞き取りデータを材料にする場合、一定の量が保証された方がよい。定点観測を持続的に行ったり、できるだけ多数の対象を選

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 8月号

人民中国雑誌社 定価 400 円 (税込)
[年間購読料 4800 円 (税込)]

「特集・チベット解放六十年——着々と進む現代化」六十年來の発展と変化 ◆ 自然を守りインフラ建設 ◆ 何よりも生活向上が大切 ◆ 内地で学び、故郷で貢献【連載】

◆ チャイナ・パワーを読み解く Part II ⑨ 中国創新の粋——高速鉄道 ◆ 中国伝統の技 ⑨ 代々伝授されてきた印刷術 ◆ 私のしごと ⑩ スポーツ推進活動をする社區の社会体育指導員【アングル】マツクは中華料理を変えられない (張維為・ジュネーブ外交・國際關係學院教授) はか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
2003 (3937) 0300 (東方書店 2010 年 1 月号より「人民中国」デジタル版を Kindle などで販売しています。サンブル版の試し読み (無料) もできます。

<http://www.tuisan.co.jp/magazine/1385>

んで比較を行ったりするのが有効だろう。

ところで、調査・聞き取りの有用性は歴史研究に限らない。現代中国の分析にとつてとりわけ不可欠で有用な方法だ。

中国当局が政治的データ（党員の職業構成や地域構成など）をほとんど出さないで、政治社会の変動の分析には調査や聞き取りが不可欠となる。

市場化で社会の階層化が進む中、中国共産党が大変身しているが、その主役の一人は「私営企業家」だ。七四〇万社、従業員八六〇〇万人という巨大勢力である（二〇〇九年）。彼らが党とどのような関係を持つのか（いま三〇パーセントが党員だという）、民主化の旗振り役になるのか、現行党一国家体制の擁護者になるのか、こうした彼らの政治指向が中国政治の帰趨を決めそうである。調査、聞き取り、インタヴューが必要となるが、簡単にはできないから、先行のリライアブルな調査を利用する。B・J・ディクソン（ジョージワシントン大学）は二回にわたって私営企業家を調査しているが、体制は

私営企業家を「抱き込んで」、双方はもたれ合いの関係にあり、企業家が民主化の旗ふりをする将来像は描けない、と彼は結論する（B・J・Dickson, *Wealth into Power*, Cambridge Univ. Press, 2008）。

ディクソンのパートナーは北京大学国情研究センターで、実際に調査を担うのは同センターである。この種の聞き取り、調査については、中国側（しかも有力機関）の協力がほぼ絶対条件なのである。新手法での現代中国（史）研究は魅力的で公式データの決定的欠落を埋めてくれることだろう。だが、すでに述べたような注意や警戒も欠かせない。

（もうり・かずこ） 早稲田大学名誉教授

月刊『東方』の定期購読をお薦めします

■A5判・本文六四頁／毎月五日発行

■年間購読料一、〇〇〇円（税・送料込み）

■お申込は郵便振替（〇〇一四〇一四一〇〇一 株式会社東方書店）まで。ご住所・お名前・何月号からご希望かを明記。

■Fujisan.co.jpにて、『東方デジタル版』が購読いただけます。http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281690377

■郭沫若研究会報 第十二号

【First World Congress of the International Guo Mao Academy】特集】郭沫若書法管見（河内利治「君平」）／九州大学所蔵の郭沫若「盈盤灘水碧羅純」詩軸小考（岸田憲也）ほか（*日本郭沫若研究会事務局・熊本県立大学外国語学部岩佐研究室付） ☎〇九六―一三六四―七〇九八／FAX〇九六―一三七二―一〇七二）
 「日本郭沫若研究会事務局発行 B5判 二四頁 二〇一一年三月発行」

■「橄欖」第18号

【目次】『滄浪詩話』の隱喻体系および詩学的趣旨についての新論（周裕鐸）／黃庭堅詩歌の伝播と受容におけるテキストの予構造（邱美瓊）／陸游の嚴州赴任と『劍南詩稿』の刊刻（甲斐雄一）／慶應大・幸田成友旧蔵の市河寛齋「陸放翁詩醇」首巻考（金明蘭）／宋代魚父詠にみる自然観察と叙述特徴について（陳素貞）／「研究ノート」『宋詩選注』所収作品の歴代選本における収録状況（三野豊造）／東坡巡礼の旅Ⅱ（加納留美子）／紀年陸游誕辰八八五周年暨陸游与鑑湖國際研討会参加報告（甲斐雄一）／第一回南宋代文学研究談話会報告（浅見洋二）『宋代詞文研究会発行 B5判 二三八頁 三、〇〇〇円 二〇一一年三月*東方書店にて取扱中』